

【論文題目】

看護実践能力に基づく患者安全教育ーその歴史および展望ー

Patient safety education based on nursing competency -history and perspective-

要旨

本研究では、看護実践能力を高める教育とはどのような教育なのかが中心テーマである。著者は、自己の看護師と看護教員の経験を通して、これからの看護師に必要なのは「安全」の能力であり、それは「看護実践能力の核である」という仮説を構築した。その仮説を検証することにより、「安全」の能力の育成、すなわち、看護実践能力を向上するための方策と我が国の看護教育における方向性を見出すことが目的である。実際の検証では、文献検討と調査研究による2つのアプローチを用いた。第一のアプローチでは、看護の原点から現在までを概観し、看護実践能力とそこにある「安全」の概念を歴史的視点から検討した。第二のアプローチでは、文献研究から導き出された結果に基づきカナダで発展した Health Professional Education in Patient Safety Survey (H-PEPSS)日本語版による調査結果から、著者の中心テーマである「看護実践能力」と「患者安全」との関連を議論した。

本研究は5章構成とした。我が国では少子・超高齢化社会となり医療における看護師の役割がさらに拡大した。新卒看護師の看護実践能力の低下に関する問題は、看護師が関与する医療事故、早期離職や医療費の高騰などとも関連する社会的に重大な懸案である。これらの対策として様々な取り組みがされてきたが、依然として解決策を模索している状況が続いている。第1章では、研究の背景、それに伴う諸問題および研究目的を詳述した。

第2章では、看護の起源から近代看護の芽生えまでを年表に整理し、事象と看護の発展との関連を検討した。同時に、現在の医療に求められる「安全」の由来となるものを抽出した。ついで、我が国が抱える医療の現状と課題を調査し、看護実践能力に焦点をあてた。人の本能的な「安全」の意識は、いわゆる基本的欲求 (need) であり、文明の発展とともに社会システムの変化と人々の生活範囲が拡大したことによって、家庭にあった看護が社会における職業へと変化(発展)した。この自己のものから社会的なものへと変化する過程で、「安全」の概念と認識が芽生え、確立されたと考察した。しかし、さらなる自然科学の発展によって人々への恩恵や危険も近代化と同時に、「安全」の概念も近代化し、これが現在の「安全」の概念の基となったと分析した。諸外国と我が国の「安全」の捉え方の相違の背景には、土着信仰をルーツとしながら発展した仏教の「安らぎ」の精神が、現在の我が国の看護の概念に影響していると考察した。

米国の看護は、専門職教育と資格制度が一体となって発展したことにより看護独自の機能確立の必要性が認識され、その独自の機能の獲得を目的とする「看護過程」の開発が推進された。さらに、その看護過程の発展は、20世紀の看護の概念の確立へと導き、看護の社会的役割を明示するとともに社会が看護の果たすべき責任を認識することになり、看護の評価基準と能力の評価および能力の定義とその構成要

素の研究を推し進める原動力になった。他方、我が国では米国から導入した看護過程の新しい概念の理解に取り組み、看護の現場に適用したが、結果的に安全面の意識に対する考え方の相違に繋がったと考察された。

専門職教育は、修得した知識や技術が実際の場面で発揮できる能力の育成が目標である。看護を学ぶ意義とその有効性をより意識して、看護学生が患者を中心に指導者や他の学生らと共同しながら実践を体験する機会があることと、その体験を自己が可視化できる環境が必要と考えられる。したがって、我が国の看護教育においては、これらのことが適切あるいは十分でないことが要因となっている可能性が明らかとなった。

第3章は、第1・2章の分析結果を踏まえた看護実践能力（Nursing competency）の概念に関する研究である。我が国では、米国の看護教育の枠組みを基盤として看護実践能力の定義と卒業時の到達目標が提言されている。しかし、両者の内容には相違があり、なぜ相違が生じているのか、そしてその相違とはどのようなものかを、発展の歴史的経緯を比較検討した。その結果、“Competency”という単語は多くの概念を含むという性質があり、多様な領域で用いることが可能であるがゆえに、これを定義することが非常に困難であることが判明した。高い能力を持つ21世紀の看護師、医療専門家の育成には、“Competency”の概念が必要であり、能力基準とそれに伴う能力評価が不可欠である。看護実践能力はいくつかの要素で構成され、中でも「安全」の能力は医療の質への貢献の意義において最も重要な能力であると指摘され、「患者安全」教育への転換が推進されている。医療の質は、治療や看護によってもたらされる成果であり、「安全」が質と成果を決定する。すなわち、現代の医療においては「安全」がもたらす成果が、人々や社会への貢献度を左右するからである。しかしながら、我が国では看護実践能力の定義と構成要素の捉え方に相違があり、特に看護実践能力の中でも「安全」の能力が最も重要とする認識となっていないことが、看護実践能力の向上に影響していることが示唆された。

第4章は調査研究である。第3章で明らかとなった諸外国との看護実践能力の「安全」に関する認識の相違が、我が国の看護教育にどのように影響を与えているのか、「安全」教育に焦点をあて検討した。「WHO 患者安全カリキュラムガイド（多職種版）2011」はカナダの患者安全教育構想を基としており、カナダでは教育効果を測る尺度の研究も先行していることから、カナダで開発された患者安全の学校と臨床の継続的な教育効果を測る尺度、H-PEPSSに着目した。H-PEPSS 日本語版の作成とプレテスト調査により我が国の看護教育における現状と課題を検討した。

H-PEPSS 日本語版は、翻訳版尺度作成の適切な手順で作成した。プレテストおよびパイロットスタディ調査結果から、信頼性の検証において α 係数が低い結果であった。この要因は既存尺度による逆転項目の影響を受けたためと考えられる。しかしながら、総合的には内的整合性は認められるため、H-PEPSS 日本語版は患者安全の教育効果を測ることができる尺度として一定の有用性があると言える。今後の課題として、H-PEPSS 日本語版の信頼性・妥当性検証では、【医療の多職種チームとの協働】、【安全を脅かす人的因子・環境因子の理解】および、【患者安全の文化】に関する既存尺度の選択を再度検討するとともに、より多人数を対象とした調査の実施を検討する必要がある。

調査データにおいて、臨床の全平均値が高い結果は明らかに臨床での学びが実践の自信につながってい

ることを示している。また、平均値が低い項目は学校での学習体験が少ないことを示唆している。プレテストとカナダの領域ごとの平均値比較においても、我が国ではカナダよりも患者安全に関する教育内容が少ないことを示している。我が国では安全教育が不足しているのが実態であると言わざるを得ない。

我が国では、「患者安全」と明記した講義・科目あるいは演習などはほとんど行われていないことはすでに述べた。しかし、H-PEPSS 日本語版および聞き取りによる調査結果では、対象者たちは患者安全の内容の一部を認識している、または理解していると考えられた。これは、我が国の「安全」教育には患者安全と共通の内容があることを示している。

安全の能力は、看護の質と密接に関連していることから、「安全」の能力は看護実践能力の核となる。諸外国では患者安全は初年度の初日からカリキュラムに組み込まれている。看護教育において、できる限り早い段階から患者安全の知識を教授し、実践体験によって患者安全能力を育成する必要がある。適切な教育方法と教育開始のタイミングなどを検討するために、まず用語「医療安全」「看護管理」「患者安全」の定義を検討する必要がある。これらの用語の定義を特定し、我が国がどのような「安全」教育を目指すのかを決めるためには、最初のステップとして、H-PEPSS 日本語版を用いた調査によって、患者安全教育との内容の比較、教授時間数・方法などの現状を把握する必要がある。

第5章は総合的考察である。「安全」の語彙には人間の生存における生態機能とあらゆる活動が含まれており、人間にとって最も重要な概念である。我が国は、宗教・言語などの文化的要因の影響により「安全」の概念の捉え方に相違があり、これが看護教育における理論の理解、看護実践能力と構成要素の相違に繋がり、看護実践能力の向上に影響を及ぼしている。現代社会に対応できる看護実践能力は、構成要素の中でも「安全」の能力が核であると認識を変革する必要がある。

高次な医療専門職者の教育は、修得した知識や技術が実際の場面で発揮できる能力の育成が最も重要である。そのため、看護実践能力のカギを握る「安全」の能力の育成にはWHOが推奨する「患者安全」を学ぶ意義と有効性を意識した教育と、看護学生が患者を中心に指導者や他の学生らと協働する実践体験の機会があること、またその体験を自己が可視化できる環境が必要である。これらの課題を解決する教育方法の開発には「患者安全」教育に関する現状の把握と分析が不可欠である。学校や臨床における「患者安全」の教育効果を測るH-PEPSS 日本語版による調査結果は、我が国の「患者安全」教育と看護の方向を示すものであり、H-PEPSS 日本語版は有効な尺度である。

以上のことから、看護実践能力のカギを握るのは「安全」の能力であり、看護実践能力を高める教育とは「安全」の能力を育成する「患者安全」教育であると結論する。21世紀は人間本来の生存する力が試される時代であり、歴史的視野に立てば、看護が安全へとシフトしたことは必然である。「患者安全」教育によって「患者安全」の能力を修得した新しい看護師が、この複雑で進化し続ける医療システムのリーダーになり、活躍することを切に望みたい。

以上

(名城大学大学院)